

出題のねらい

㊦は、岡本かの子の小説「鮎」からの出題です。「鮎」は、東京にある「福ずし」の娘・ともよと、そこに通う初老の男性客・湊とのやりとりを描いた作品です。湊は、鮎を食べることが「慰みになる」といい、ともよにその理由を語ります。幼い頃、湊は食事が苦手でしたが、母親の作った鮎がきっかけとなり、偏食を克服します。問題文は、その場面から抜粋しました。抜粋部分では「母親」と「母」、二つの呼び方が使い分けられており、現実世界に存在する母は「母親」、空想世界の母は「母（お母さん）」と呼ばれています。母親が子供の偏食を治すという話の枠組みだけでなく、子供の偏食が理想の「母」の不在と密接に関わっていることを、丁寧に読み取らなければなりません。作中の細かな記述に注目し、登場人物の心理の変化を的確に読み取れるかどうかが出題のねらいです。

㊧は、民俗学研究者である神崎宣武氏の『「まつり」の食文化』から出題しました。日本各地で古くから継承されてきた祭礼を分析し、農山漁村部と都市部それぞれの伝統的祭礼を比較することから、特に後者で発達した祭礼の特徴を中心に述べる一文を問題文としました。代表的な都市祭礼として京都の祇園祭を取り上げ、都市部の祭礼に根差す信仰と祭礼の特徴を説く筆者の視点と主張を的確に読み取れているかどうかを問う問題です。文体にも用語にも、深い専門性を必要とするものは見受けられません。具体的事例をあげつつ繰り返される筆者の主張を、どれだけ読み取れるかが分かれ目になってくる問題です。

㊨は、『十訓抄』という説話集の第一「人に恵を施すべき事」の十五から出題しました。夏も盛りのある夜、藤原道長の娘彰子の屋敷に勤める女房たちと、偶然女房たちの話を立ち聞いた殿上人の風流なやりとりを描いたものです。平安時代の貴族たちは漢詩や和歌をたくさん覚えていて、その場に合う詩歌を、優雅に口ずさみながら、会話を楽しむという時間を風流な時間として大切にしていたのです。そういった貴族文化が千年以上前に日本で花開いていたことを知り、古典を読む上で基礎的な知識を持つこと、その知識で現代語訳できる表現力、思考力を問うことを狙いとしました。

㊩

【解答】(50点)

- |    |  |        |      |         |
|----|--|--------|------|---------|
| 問一 | a 翌日                                   | b 湧(沸) | c 征服 |         |
|    | d 絶叫                                   | e 生涯   |      | (各2点×5) |
| 問二 | 1 エ                                    | 2 イ    | 3 ウ  |         |
|    | 4 ウ                                    | 5 イ    |      | (各3点×5) |
| 問三 | 玉子焼き鮎                                  |        |      | (3点)    |
| 問四 | ウ                                      |        |      | (3点)    |
| 問五 | 子供は色、香、味のあるものを食べると、体が穢れるように感じるから。      |        |      | (5点)    |
| 問六 | それまで笑い顔でしかおいしさを表さなかった子供が、むやみに疝高く笑ったから。 |        |      | (5点)    |
| 問七 | 脅かされるにおい                               |        |      | (3点)    |
| 問八 | 母親も子供もこんこんむせた。                         |        |      | (3点)    |
| 問九 | イ                                      |        |      | (3点)    |

【解説】

①知識・技能

②思考力・判断力・表現力

問一 漢字の知識を測る問題です。まずまずの出来でした。誤答として多かったのは、cを「制(服)」、dを「(絶)糾」とする例です。

問二 語彙力(知識)、および文脈に合致する言葉を選び取る、思考力・判断力を測る問題です。2、4の正答率は低く、ともに4割程度でした。2は、「おいしい」と言葉にするのが憚られたのですから、そうした躊躇を表すのにふさわしい語を選びます。4は、直後に「はっ、として顔の力みを解いた」とあるので、緊張感を表す語を選ばなければなりません。子供は鮎を十分に味わっているのですから、息をイ「止めていた」とするのは不適當です。

問三 空欄にふさわしい語句を本文から抜き出す、判断力を測る問題です。正答率は良かったです。烏賊を食べたことがある人なら、皮を剥いだその身が「白い」ことを知っているでしょう。玉子焼きの鮎をおいしく食べた子供に対して、母親は続いて烏賊の鮎を出しました。先ほどの鮎と同じように食べればよい、というのですから、ふさわしい語句はおのずと絞られます。

問四 文脈に即して本文を適切に読み取れるかどうか、思考力・判断力をみる問題です。正答は3割程度でした。解説の冒頭で述べたように、子供の偏食と理想の母の不在には密接な関係があります。子供は腹が減ると「飢えは充分感じる」のですが、何も食わずに飢えぬいて、「死んでも構わない」とさえ思います。ここで子供が、飢えて「くぼんだ腹」

## 一般入試／国語(後期)

に両手を「無理に」さし込み、「お母さあん」と声に出しているのに注目して下さい。これは、自分の空腹を満たしてくれる母を切望しているさまを描写しています。そうした母が現実には存在しないからこそ、「呼ぶことだけは悲しい楽しさだった」というのです。誤答で多かったのはアとイで、アは明らかな誤り、イは「飢え」と「母」の関係について説明がなされていません。

**問五** 設問に合致する一文を見分ける判断力、それを的確に要約する表現力を測る問題です。正答は半数程度でした。設問は「最もよく分かる一文」を探し出して要約するように指示していますが、二文にまたがって要約したり、全体の内容を漠然と要約する解答が多数見られました。本文をよく読めば、設問の指示にふさわしい「一文」は限定されます。その一文の前後に置かれる「食事が苦痛だった」、「空気のような食べものは無いかと思う」を抜き出した解答も多かったのですが、前者は子供の性質を具体的に述べておらず、後者は子供の欲する食べものを比喩的に示しているにすぎません。これらは「最もよく分かる一文」という指示に合致しておらず、部分点としました。全体を漠然と要約しただけの解答は、加点していません。

**問六** 本文の展開を文章に即して読み解く思考力と判断力、それを過不足なく要約する表現力を測る問題です。完全解答は1割で、問五と同様、設問の要求を無視した解答が目立ちました。「本文中の語句を使って」とあるので、独自の言葉で漠然と説明するのみでは加点されません。部分点を与えた解答で最も多かったのは、下線部の直前、「じっとしてられない手の指でつかみ搔いた」、「むやみに疍高に子供は笑った」のみに触れ、そこに至る子供の感情表現の変化に注目していない例です。母親は子供に食べさせる鮎の順序を、しっかりと計算に入れています。二つ目の烏賊を食べた時点で、子供はすでに母親の思惑どおりになっていますが、そこまでは笑顔でしか感情を表していません。三つ目を食べた時、子供に明らかな変化が現れます。こうした顕著な変化を見てとったからこそ、母親は「勝利」を確信したのです。

**問七** 同じ意味の語句を抜き出す、思考力・判断力を測る問題です。良く出来ていました。「色、香、味のある塊団」とする解答が見受けられましたが、「色」は「生臭」と関係がありません。

**問八** 物語の展開を順序よく読み解く思考力・判断力

を測る問題で、正答率は7割程度。問五・問六と同様、設問の要求（「該当する一文」を抜き出す）を無視した解答が目立ちました。多かった誤答例「手の裏表を返して子供に見せた。」は一文ではなく、また母親の一方的な行動に過ぎません。「家族じゅうで一番好きである。」も一文でない上に、子供の母親に対する一方的な感情です。

**問九** 物語の設定と展開をふまえ、傍線部を含む一段を精密に読み解けるかどうか、思考力・判断力を測る問題です。正答率は8割、誤答で多かったのは、ウとエでした。問題文の冒頭で「色、香、味のある塊団」を恐れていた子供（問五参照）は、母親が握るのと「競争」するように鮎を食べるようになり、母親とともに「一つの気持ちの痺れた世界」に入り込み（問八参照）、母親の握る不格好な鮎に「愛感を覚え」ています。こうした心地良さの中で、想像の中の母と、現実の「母」（それまでは「母親」と表現されていました）とが一致しかけます。「もっと、ぴったり、一致して欲しい」というのが子供の願望ですが、一致したらどうなるのか分からないので、「恐ろしい気もする」と、わずかな不安を覚えているのです。ウは、現在の母親が理想の母であると「気づいた」とあるのが不適當。エには「疑念」とあり、「一致して欲しい」という子供の願望から遠ざかっているため、ふさわしくありません。



### 【解答】(50点)

問一	a 肥大	b 維持	c 依存	
	d 非業	e 破綻		(各2点×5)
問二	A ウ	B イ	C ア	
	D エ			(各3点×4)
問三	i I 信仰	II 日常		(各3点×2)
	ii ウ			(3点)
問四	イ			(4点)
問五	何百年もの間、代々定住の地であった農村とは違い、都市は多様な出自や信仰を持つ人々が集まり通過する場所でもあったため。			(5点)
問六	すべての人をつつみこむ共同体としての祈願			(3点)
問七	そこでは、～があった。			(3点)
問八	エ			(4点)

【解説】

①知識・技能

②思考力・判断力・表現力

問一 漢字の知識を測る問題です。全体的にはよくできていました。誤答としては、d「非業」を「悲」で書くもの、e「破綻」を正確に書けないものが目立ちました。この設問に関しては、論理的文章によく見られる語彙や日常の報道文などでよく見かける語を中心に設問化しています。漢字学習を単なる知識の蓄積としてとらえず、文章を読み解くキーワードを把握するものとしての学習することもここがけてください。

問二 語彙力(知識)、および文脈に合致する言葉を選び取る思考力・判断力をみる問題です。全体的によくできていました。空欄補充問題は、例年出題されているとおり、筆者の論旨の展開に関わる語を出題部分としました。この問題での設問選択肢は、「しかし」、「そして」が接続詞、「まず」、「やがて」が副詞です。接続詞は、文章相互の関係を整理し論旨の展開を明確にします。また、副詞が論理的文章で用いられる場合、筆者の意志や判断を表明しようとする文脈に現れることが多い傾向があります。その主張を読者に的確に伝えることを強く意識とした箇所と言えます。空欄への正確な補充には、文章全体の構造の把握、前後の文の関係把握だけではなく、全体の論旨を踏まえた選択にここがけてください。

問三 iは、本文冒頭部のキーワードとして用いられる「ハレ」の語に関する補足説明文の空欄補充を通して、文脈に合致する言葉を選び取る思考力・判断力をみる問題です。全体的によくできていました。空欄IIに関しては「信仰」の解答を正答として期待していましたが、数例見られた「祈願」も同様に扱っています。IIの「日常」については、「ハレ」の語が再度登場する終末部にある「日常の活動がにぶる季節」にそれが設定されるという文脈に気がつくかどうかでした。

iiは、文学史の知識を測る問題です。正答率は7割程度でしたが、柳田国男の代表的著作である『遠野物語』は是非ともおさえておいて欲しいところです。

問四 文全体の導入部の読解が的確になされているかを選択肢形式ではかり、思考力・判断力をみる問題です。全体的によく出来ていました。導入部の論述では、都市のまつりの特徴として、行事の周辺で展開していく多様な事象にスポットを当てていま

す。ただし、設問とした傍線部は、そうした周辺の事象ではなく、まつりの中核となる本来の行事の存在について提示した部分です。そこに気がついていれば、正答は容易に得られるはずですが。選択肢ア、ウ、エは、いずれも周辺事象について述べたものを要約しています。

問五 筆者は、本文半ばで、農山漁村部の定住性と都市部の流動性・多様性に、それぞれに異なるまつりの原理の由来を求めています。この論旨を読み取る思考力・判断力、それを自分の言葉で適切に要約する表現力をみる問題です。正答は5割程度。都市部のまつりの原理のみを述べていたり、出題文の一部をそのまま書き抜いただけの解答が目立ちました。論旨を読み取り自らの言葉で要約することは、論理的文章を正確に理解するためには重要な作業です。日常的にも、文章に接する際の習慣として身につけておいてください。

問六 指示語の正確な読み取りから思考力・判断力をみる問題です。全体的によくできていました。指示語の指示範囲を確定させながら読み進めていくのは、論理的文章を読解するには必須の要件です。ほぼ、指示範囲を把握していながら、指定字数に対して解答欄を大きく余している解答が散見されました。こうした本文中からの抜き出し問題の場合は、指定字数も一つのヒントであることを忘れていってください。

問七 筆者は、都市部のまつりでも例外的に夏場以外に行われる祭礼が存在することを指摘し、それらが本来郊外地に所在していたことから、農山漁村部のまつりとの共通性を有するとみています。この部分の論旨の読み取りから思考力・判断力をみる問題です。正答率は7割程度でした。文脈の流れを的確につかんでいれば、もう一度、農山漁村部と都市部のまつりの差異を述べていた本文半ばに立ち返り、解答となる一文をさがすことにつながります。

問八 設問部は、文全体の結びに向けて都市部において夏まつりが活発化する二義的な要因を追加説明する文脈にあります。この文脈構成の把握と本文終結部の論旨が読み取れているかどうかをはかり、思考力・判断力をみる問題です。文脈構成の把握がかなえば、文末数段落の要旨を読み取ることで当該文脈のキーワードである夏の暑さによる「停滞」からの「活性化」を含むエの選択につながります。

三

【現代語訳】

ある殿上人が、五月の二十日過ぎの頃、たいそう暗い夜に、皇太后宮の御殿に参上して、馬道にたたずんでいた時、奥の方から、人の話し声が多くしてきたので、自分がそこにいるともわからないようにして隠れてのぞいていたところ、中庭の遣り水に、螢が多く群がっているのを見て、さきの方にいる女房が、「たくさんの螢だこと。集めたような様子に見える」と言って過ぎると、次の人が優雅な声で、「螢火乱れ飛びて」と漢詩の一節を口ずさんだ。さらに次の人が、「夕殿に螢飛びて」と声を引いて歌う。一番最後にいる人が、「隠れぬものは夏虫の」と、はなやかにひとりごとを言った。それぞれに優雅で風情があったので、この男は、これという風情のあることも思い浮かばないようなことが残念で、ねずみの鳴き真似をしだしたところ、先の方にいる女房が、「なんだか怖ろしいこと。螢にも声があるのねえ」と言って、少しも驚いた様子もなく、しっとり落ち着いていて、そしらぬ様子であるのも、あまりにも趣き深く愛らしく思われたのに、もう一人が、「鳴く虫よりも胸をうつと思っていたのに」とそれに合わせた。それもまた、深く思いをこめたところが、たえられないほどおおくゆかしいことだった。いずれもそれぞれに、たいそう優雅に思われたのであった。「鳴く虫よりも」の意味は、

音を立てないでいつまでも変わらず心が燃えるように光を放つ螢は、好きだと騒がしく鳴く虫よりもいっそうしみじみと胸をうつように思われる  
 というものである。

【解答】(50点)

問一	a てんじょうびと	b さつき		
	c やりみず	d ほい	(各2点×4)	
問二	ウ			(3点)
問三	1 イ	2 エ	3 オ	
	4 ウ	5 ア		(各2点×5)
問四	A エ	B イ	C ア	(各4点×3)
問五	ウ			(4点)
問六	ねずみの鳴き真似をしたところ			(7点)
問七	イ			(3点)
問八	ア			(3点)

【解説】

①知識・技能

②思考力・判断力・表現力

問一 漢字の読みの知識を問う問題です。「殿上人」「五月」「本意」は正答率が高かったのですが、「遣水」は5割程度でした。「透垣(すいがい)」「前栽(せんざい)」等と並ぶ、貴族の屋敷にあるもの

の一つです。貴族の衣装や、調度品など、当時の生活や文化を知ることに関心を持ちましょう。

問二 空欄補充の問題。直前の係助詞「こそ」に注目して、已然形を選ぶ、知識と思考力を問う問題です。8割程度の正答率でしたが、係り結びの法則は、基礎知識として持っておきましょう。

問三 助動詞の意味を選ぶ、古典の基礎知識を問う問題です。おおむね高い正答率でしたが、波線部4「ける」の詠嘆の正答率が3割程度でした。この「けり」は、「まあ、螢も鳴くのね?知らなかったわあ」という発見による詠嘆でした。同じ記号は二度使えないのをヒントに、「過去」ではなく、「詠嘆」を選べると良かったのですが。助動詞の意味は、古文を読む時には常時必要なので、しっかりと暗記しておきましょう。

問四 語句の解釈を選ぶ、思考力や判断力を問う問題です。Aは、「人の音」が「話し声」、「あまた(数多)」が「たくさん」の意であることからエを選びます。「ければ」の已然形+ばが確定条件であることも知っておきましょう。Bは、形容詞「ゆゆし」がここでは、「大変だ」の意味で用いられていることに気づいてイを選びます。Cは、「そら」が「偽り、にせ」の意味で、ここでは「そ知らぬ」の意味で用いられていることからアを選びます。正答率は8割を超えるものでした。

問五 引き歌の意味する内容を選ぶ、思考力を問う問題です。「つつめども隠れぬものは夏虫の身よりあまれる思ひなりけり」(『後撰和歌集』夏)の和歌を、「かくれぬものは夏虫の」の部分を用いることによって、残りの「つつめども……身よりあまれる思ひ」を想起させる技法ですから、ウの「人をいとおしく思う気持ちは包んでもあふれてしまう、ということ」を選びます。正答率は5割。和歌のテクニクは、掛詞、縁語、枕詞、序詞だけではありません。引き歌に関する問題は、センター試験でも頻出ですので、しっかり押さえてください。

問六 現代語訳により、知識と表現力を問う問題です。現代語訳をするときは、古文単語の知識、接続助詞の意味、動作をする人やされる人について、しっかりと押さえた訳を心がけましょう。今回は、「ねず鳴き」とは、「ネズミの鳴き声」つまり、殿上人がなんとかこの場に参加したくて、隠れたところで、「チュウチュウ」と声を出しはじめたこと、「ければ」の「已然形+ば」は、確定条件ですが、「ば」の前後で

原因理由を表すものではないので、「ので」ではなく「ところ」と訳すようにします。正答率は5割程度。今の言葉に直しても、訳にはなっていないということにならないよう、気を付けましょう。

**問七** 空欄に入る最も適当な形容詞を選ぶ知識と思考力を問う問題です。空欄の直前に、この一連の流れを「奥ゆかし」と表現していることに注目します。「優し(やさし)」に、「優雅である」の意味があるので、これを選びます。正答率は7割程度。感情や状況を表す形容詞の意味は、暗記しておくとその場の状況を、作者や登場人物がどのように思っているかということがつかみやすいです。

**問八** 文学史の知識を問う問題です。アの『方丈記』が十三世紀、イの『徒然草』は十四世紀、ウの『源氏物語』が十一世紀、エの『今昔物語集』が十一世紀、オの『太平記』が十四世紀、そして、『十訓抄』は十三世紀の作品なので、アを選ぶのですが、正答率は2割にもなりません。難問でしたね。文学史は、地道な努力しか味方になりませんので、古文を読むたびにその作品の、成立時代や作者、ジャンルについて、こつこつまとめる姿勢が必要です。